



未来につなぐ 私たちの一歩

小学校のPTAで作る防災組織 イベント通し地域との連携強化

南区 力合西小学校防災委員会



クロスロード
ゲームに挑戦する参加者



試食後は、食べ残しや箸、輪ゴムなどを分別し
片付ける方法を学びました



力合西小学校PTA会長の北岡忠勇さん(右)と、
防災委員長の土井裕加里さん



防災用品や、災害時避難
所に配置された音に
敏感な人が利用できる
「カムダウボックス」
の展示も

2017年4月、市内の小学校で一早く、PTAによる防災委員会が立ち上げられた熊本市立力合西小学校(大江剛校長)。発足した翌月に、地域の自治会や民生委員にも参加を呼び掛け、災害時に避難所等で配布される食事を試食するイベント「防災クッキング」を実施しました。防災委員長の土井裕加里さんは、「委員会が立ち上がったことで、保護者だけでなく、子どもたちの防災への意識も高まっているように感じます」と語ります。

11月に開催された2回目のイベントには、31家族、約140人が参加。「今回は、防災ゲームの体験と防災食のアルファ米などの試食を行います。参加される家族も前回より増えています」とPTA会長の北岡忠勇さん。試食会では、みんなおいしそうに準備された防災食をパクパク。1年生の保護者・坂田百合さんは、「熊本地震の際は、子どもが小さく迷惑になると思い避難所には行きませんでした。避難所で配られていたアルファ米を今回初めて食べましたが、おいしかったです」と笑顔を見せていました。

カードゲーム形式で、災害対応を自らの問題として考える

次に、「クロスロードゲームを通して防災を考える」と題し、阪神淡路大震災をきっかけに作成されたカードゲーム形式の防災教材「クロスロードゲーム」を体験しました。

このゲームでは、災害時に判断を迫られる場面を二者択一式で参加者に投げ掛け、瞬時に判断して、自分ならどうするかを考えます。「避難所には3000人がいます。2000人分の食事が届きましたが、配布しますか」という問い掛けに、自分の答えを決めたら「YES」「NO」のカードを裏返してテーブルの上に出し、掛け声で一声に表に返します。「YES(配布する)」と答えた人の中には「子どもだけ先に配る」、「NO(配布しない)」の人の中には「トラブルになるので見通しが付くまで配らない」という声が聞かれたり、また同じ「YES」のカードを出しても理由が異なるなど、いろんな意見が飛び交っていました。ファシリテーターの徳永伸介さんは、「このゲームに正解はありません。災害時には、いろんな人の、いろんな意見があることを知ってもらうことが大切です」と訴えていました。

5年生の松本るい君は、「ゲームをやってみて、一人一人意見が違うことが分かりました。もしまた災害が起こったら、自分なりの選択ができると思います」と力強く答えてくれました。「今回のような体験を地域と一体となり行うことで、災害時に助け合える大きな力になるはず」と土井さん。今後も、定期的に防災意識を高める活動を続けていくそうです。

復興元年プロジェクト 「希望の花を咲かせようin中島」

西区 中島校区

小学生と老人会の交流会が定期的に開かれるなど、子どもと高齢者の交流が盛んな中島校区。高齢化が進み、1人暮らしの世帯も多いなか、こうした交流が高齢者の活力になっているそうです。地震後も、住民同士が励まし合うことで、少しずつ笑顔を取り戻してきました。

2017年12月、中島小5、6年の児童が校区内の1人暮らしの高齢者宅を訪ね、学校で育てた花と全児童が書いた手紙を贈るプロジェクト「希望の花を咲かせようin中島」が開催されました。

同プロジェクトは、中島小と校区社会福祉協議会が企画。同会会長の上妻正勝さんは、「中島小や社会福祉協議会、民生委員の方々など、たくさんの地域住民の協力



「緊張したけれど、『ありがとう』と言ってもらえ
うれしかった」と話す児童



花と手紙を渡した後、しっかりと握手する様子

のおかげで実現することができました。地域が一丸となって前へ進んでいる象徴として、今後も続けていきたい」と力強く話します。

当日、児童が「心を込めて育てたお花です。日当たりのよい場所に置くと長く咲きますよ。これからも元気で過ごしてください」の言葉と共に、花と手紙を手渡すと、高齢者の方々は「あなたたちの元気な姿を見るのが何よりの薬。このお花は大切に育てます」と、大事そうに受け取っていました。「皆さんに喜んでもらって、とてもうれしかった」と微笑んだ井手優希君(5年)。

後日、地域の方々から小学校宛に電話や手紙でお礼の言葉が届き、絆がさらに深まったようです。

職員が一丸となり復旧作業 震災の経験を保存し伝える役目も

西区 くもと森都心プラザ図書館

くもと森都心プラザ3・4階にある「プラザ図書館」(約30万冊)。「本震でスプリンクラーの配管が破損。散乱した本が水浸しになっている所もあれば、割れたガラスが飛び散っている所もありました」と館長の河瀬裕子さんは振り返ります。

2016年5月の営業再開に向け、全職員が一丸となり復旧作業に当たりました。東日本大震災後の復旧作業を視察していた河瀬館長は、まず本の落下防止のため棚ごとに荷造りひもで補強する作業に取り掛かりました。ぬれた本には、1ページずつキッチンペーパーを挟み、ガラスが割れたフロアの本は、全ページをはけて払うという地道な作業が続きました。

5月6日の営業再開日には、この日を待っていた市民がたくさん訪れました。車中泊に関する本や、鍋一つ



市民に学びの場を提供しようと、読み聞かせや心のケア、橋梁破損の現状を子どもたちと学ぶ催しを実施



一丸となって復旧作業にあたったスタッフ

で料理が作れるアウトドア関連本を借りにくる人も。館内でも「備える」と題した企画展を実施。「インターネットを見られない被災者のために避難所情報を配布するなど、とにかく自分たちにできることを行いました」

復旧工事が進む中、空調が効かず夏は40℃超え、冬は寒さに震えながらも、本の貸し出しをストップしたことはなかったといいます。

発災後、駅周辺にあふれた外国人への対応も考え、10カ国語に対応した説明書を各カウンターに設置する他、全スタッフが簡単な手話を学び、とっさの誘導ができるよう準備をしています。さらに、「熊本地震に関する情報を集め、整理保存し、後世に伝えていくことが、私たちの役目」と河瀬館長。次世代に生かせる地域資料づくりにも力を注いでいきます。